

## 三月前期のモーゼス・ヘス

谷口 健治

【要約】 一八一二年ボンでユダヤ系商人の息子として生まれたモーゼス・ヘスは、ドイツの最も初期の社会主義者の一人。彼は一八三七年『人類の聖史』を出版し、宗教的社会主義者として登場する。次いで彼は、一八四一年の『ヨーロッパ三頭政治』によって文名を確立した。同じ年ヘスは『ライン新聞』の創刊運動に活躍し、同紙の編集者の一人となる。ヘスがマルクスと知り合ったのはこの時期のこと。ヘスは彼と一八四四年から四五年にかけて共に活動し、この間に彼に幾分の影響を及ぼしたと考えられる。しかし一八四六年になると、ヘスは、「真正社会主義」に理論的基礎を与えたものとして、エンゲルス、マルクスの攻撃の対象となり、一八四八年に至って彼らと訣別する。本稿においては、この時期までのヘスの思想的発展を辿る。段階的に考えを變じていったヘスの場合、各段階での見解を叙述するという手続きなしには、その全体像を把握し難いからである。

史林 五七巻一号 一九七四年一月

### はじめに

この国においても、モーゼス・ヘスの名は、既に戦前から、メイリングのマルクス伝などを通じて知られていた<sup>①</sup>。しかしヘスの名前が、若きマルクスへの影響云々という注目で注目されるようになったのは、例の初期マルクス・ブームの中、オーギュスト・コルニエーの著作を手懸りにしてのことである。これを画期に、若干の研究によって、ヘスの著作の分析が始められた<sup>②</sup>。しかしいまだヘスの包括的な像を与えるには至っていない。本稿の課題は、この欠を埋めるべく、三月前期のヘスの姿を描出することである。この作業は、また逆に、時代の思想情況の中で理解を志す初期マルクス研究に

対しても資するところあるに違いない。

① 戦前の研究としては、本多謙三「初期社会主義諸思想」一九三二『社会史的思想史』岩波書店、一九四九年所収。ヘスについては同書の頁二九〇―二九三がある。

② 杉原四郎『ミルとマルクス』ミネルヴァ書房、一九五七年、頁六七、註二によって初期マルクスの思想形成過程におけるヘスの重要性が指摘されて以来、良知力『ドイツ初期社会主義における歴史構成の論理―ヴィルヘルム・ワイトリングとモーゼス・ヘスをめぐって―』一九六〇、『ドイツ社会思想史研究』未來社、一九六六年所収、「ヘスは若きマルクスの発展の座標軸たりうるか」『思想』、一九六九年五月など、如孝一（モーゼス・ヘスにおける人間の自己陳外把握について―ヘスとマルクスとの関係に関する考察―）『一橋論叢』四六巻一号、

一

モーゼス・ヘスは、一八一二年一月二日、ボンのユダヤ人街に生まれた。父はダーフィット・ヘス（二七九〇―一八五二）、母ヘレーネ（二七八六―一八二五）、五人兄弟の長子であった。一八一六年か一七年に、両親はボンからケルンに移住、当初植民地物産を扱う店を営んだ。モーゼスは、その際、ボンの祖父母の許に残され、素人律法学者であった祖父ナータン・ダーフィットから、厳格な、ユダヤ教徒としての教育を受けることになる。少年ヘスは、信仰の深さにかけては「祖父の正確な模倣」となった<sup>①</sup>。一八二五年一月二八日母親が肺炎で死亡、モーゼスは一三歳にして「享受しないまま」母を失なう。父親は、まもなく、モーゼスの強い希望を入れて、彼をケルンへ引き取った<sup>②</sup>。

ケルンへの転居は、少年ヘスにとって「厳しい監督から、敢て言うなら監獄から」の突然の解放であった<sup>③</sup>。彼は、父親から指示されたタルムード学習を怠って、遊び友達を求め、小説を読み漁る<sup>④</sup>。しかし、この状態は間もなく終わった。ヘス

一九六一年など、山中隆次（ヘスとマルクス―経済的陳外観を中心として―）『経済理論』六二―六三号、一九六一年、「ヘスとマルクス―ドイツ古典哲学とフランス社会主義の結合を中心として―」『資本論の成立』岩波書店、一九六七年所収など、野地洋行（「モーゼス・ヘスにおけるフランス社会主義」『三田学会雑誌』五五巻八号、一九六二年）らの研究者が出た。

そして六〇年代の終りになると広松渉が「初期マルクス像の批判的再構成」一九六七『マルクス主義の成立過程』至誠堂、一九六八年所収）などでヘスの存在を大きくクロローズ・アツプしてみせた。

なお最近ヘスの著作の一部が山中隆次、如孝一訳『初期社会主義論集』未來社、一九七〇年として翻訳されている。

は、父の許で奉公していた従兄レオポルト・ツンツ（一八〇八—一八七四）を友人として得、彼とともに宗教の問題に関心を集中し始めた。<sup>④</sup>一六歳（一八二八年）になると、ヘスのユダヤ教的な人格神に対する信仰は動搖を来す。しかし二年ほどの内面的危機の状態を経験した後、彼は神を道徳的世界秩序という形で再発見した。<sup>⑤</sup>彼は、この正義の世界秩序の中に何故「悪」が生じるのかという問題を、ルソーの自然状態論を援用して、「悪」を人間の感じ方に帰し、解決した。<sup>⑥</sup>この頃からルソーはヘスの愛読書となっている。しかしヘスは、まだ政治や社会の問題には関心を示していない。一八三〇年の諸革命も、彼には「パリの最新の流行」としか映らなかつた。<sup>⑦</sup>

父親は、このように宗教的・道徳的問題の追究に耽っているヘスに理解を示さなかつた。彼は息子に家業への専心を要求していた。ヘスが父親と衝突する下地はあつた。一八三三年春その衝突が起きる。ヘスが、父親にポンの友人の家の女中との結婚を反対されて、家を出るといふ出来事である。事件そのものは、オランダを経てパリに出たヘスが、金を使い果して、フランクフルトのおじの許へ行き、翌年親戚の仲介で帰宅するといふ形で終るが、これを契機にヘスと父親との対立は表面化した。父親は、ヘスがユダヤ教の習慣を無視した挙に出るのを怒り、ヘスは父親の金銭的な締めつけに腹を立てた。<sup>⑧</sup>父親からの経済的な独立、この願望が、二〇代のヘスには強迫観念のように付きまとう。彼は、一八三三年頃に精糖所を設立し、経営の主力をそちらに移していた父親に、以前からの植民地物産の店を譲らせることなどを画策するが、成功しない。<sup>⑨</sup>彼は、父親の帳場で働くかわら、思索を続けるほかはなかつた。彼の思索、というより瞑想は、永遠の理法としての神を認識することへと向つていた。<sup>⑩</sup>

- ④ Heß, Tagebuch, 16. 9. 1836, W. Mönke, *Neue Quellen zur Hess-Forschung*, Berlin 1964 (Zürcher NQHF 彙編) S. 40.
- ⑤ Heß, Tagebuch, 16. 9. 1836, NQHF, S. 40 f.; Heß an M. Levy, *series Lebens*, Leiden 1966, S. 6.
- ⑥ Heß, Tagebuch, 16. 9. 1836, NQHF, S. 40 f.; Heß an M. Levy, April, 1831, *Moses Hess, Briefwechsel*, Hrsg. von E. Silberner, s/v-Gravenhage 1959 (Zürcher HB 彙編) S. 48.
- ⑦ Heß an einen Unbekannten, 3. 2. 1830, HB, S. 29. Siehe auch
- ⑧ Heß, Tagebuch, 16. 9. 1836, W. Mönke, *Neue Quellen zur Hess-Forschung*, Berlin 1964 (Zürcher NQHF 彙編) S. 40.
- ⑨ Ebenda, S. 39.
- ⑩ Ebenda, S. 39, 40.
- ⑪ Ebenda, S. 40. Siehe auch E. Silberner, *Moses Hess, Geschichte*

Silberner, a. a. O., S. 9 f.

これたとする説には根拠がない。

- ⑦ Hs6 an einen Unbekannten, November, 1830, HB, S. 43. 「私  
は真実の美しき自由はまことの立憲王制の中に求められるべきだと思  
う」(Ebenda)と書らるる十八歳のヘスはまだ立憲主義者であった。  
⑧ Silberner, a. a. O., S. 13 f. 詳し。 Silberner (Ebenda, S.  
51.)も述べらるるようだ。ヘスがこのパリ旅行の時、社会主義を受け

- ⑨ Ebenda, S. 15.  
⑩ Ebenda, S. 15 f.  
⑪ 一八三五年頃のヘスの思索については Silberner (Ebenda, S. 21-  
30) がヘスの日記を用いて明らかにしてゐる。

## 二

一八三五年十一月半ば、ヘスは処女作『人類の聖史。スピノザの弟子による』に取り掛った。ヘスの精神は、瞑想の中  
で、神の真理を告知する予言者の心境になるほどの昂進を示していた。<sup>①</sup> 彼はほぼ一年を費やして、この著作を仕上げた。  
ヘスは後に、その際利用した典拠に関して、「スピノザが、私の神についての意識を、片手に聖書、片手にエティカを持  
って人類の聖史を書いたあの見地へと、完全に高めた」こと、スウェーデンボリ、サン・シモン、ベンサム、ラムネー、  
ヘーゲル、ハイネ、青年ドイツ派といった「全く同じではないにしても非常に類似した傾向を追求していた人々」を、執  
筆の途中で知ったことを証言している。<sup>②</sup> 一八三六年中にも出版される予定であったヘスの処女作が、シュトゥットガルト  
で出版されたのは、翌年の十月であった。

ヘスが『人類の聖史』で明らかにしようとするのは、世界史を支配する神の理法である。彼は世界史を神が支配する過  
程と見做す。<sup>③</sup> 人間はこの世界史に、そこで働く永遠の法則の認識を次第に深め、それに従って行動するという形で参与す  
る。スピノザに倣って「人間の自由は恣意ではなく、神の法則への意識的従順に存する」<sup>④</sup> と考えるヘスにとって、この  
認識の深化は、自由の拡大でもある。人間が法則を、神を完全に認識した時、世界史の終局目的である「救済」、精神的  
一体性と社会における「調和的協働」が達成される。<sup>⑤</sup> ヘスは、この過程を促進するため神に選ばれた、理法の告知者とい

う姿勢で彼の教説を説く。<sup>⑥</sup>

しかしヘスの世界史像は貧相である。その実質的内容は、聖書物語、俗流・自己流のキリスト教史以上のもではない。彼はこの世界史を三つに時代区分する。その根拠となるのは、まず自然界からの類推である。ヘスは言う。「時間の中に生まれるものは、三段階の発展をする。」第一段階は根の時代であり、内的生活と一体性の時代である。第二段階は花の時代、外的生活と分裂の時代、そして第三段階は果実の時代であり、再び一体性の時代である。「人類の歴史もこの三つの段階を持つ。というのは人類も生きた全体だから。」<sup>⑦</sup>更にヘスは三位一体説を歴史に流用し、三つの異なった姿で現われる神を認識する方法によって、世界史を三区区分する。第一の時期は、父なる神の啓示史、逆に人間の側から言えば想像力による神の認識の時期、第二は子なる神の啓示史、心情による神の認識の時期、第三は聖霊としての神の啓示史、純粹に精神による神の認識の時期である。これらの時期を、先述の根・花・実の時期に重ね、この三時期をそれぞれ七つに下位区分するというのが、ヘスの世界史の骨組みである。

ヘスは、彼の世界史の三時期を次のように描く。第一の時期はアダムとともに始まる。この時期のはじめには、自由と平等が支配し、所有権は存在しなかった。人々は善良で、互いに愛の絆で結ばれていた。ヘスが提示するのは、まさに人間間的・外的生活における一体性の像である。しかし時代が進むにつれてこの一体性は崩れてゆく。<sup>⑧</sup>第二の時期はキリストとともに始まる。キリストは最初に神を、しかし心情において、認識した人である。彼の愛の教説は、急速に普及する。しかしその普及は一方で形骸化したキリスト教会の支配を招き寄せる。人間の不平等は、中世の封建制の中でその頂点に達する。<sup>⑨</sup>第三の時期はスピノザとともに始まる。彼こそは知性において神を認識した最初の人である。彼以後、人間は、行為を認識された法則に合致させる能力を持つようになった。<sup>⑩</sup>ヘスはこの第三期が終ったとは考えていない。第三期は、やっと第一の下位区分の末期、ノアの大洪水や民族移動に類比される、フランス革命を起点とする動揺の時代、「理念の洪水」の時代に差し掛ったにすぎない。<sup>⑪</sup>

ヘスは、このような過去の像をもとに、「既に起こったことの結果としての未来」を解明してみせる。彼は時代の悪を「明瞭な内的な觀察法と濁った外的生活の不釣合」の中に見る。一方にはスピノザ以後の学問の成果と認識能力があるが、現実の生活においては「唯物主義、粗野な利己心」が支配している。ヘスはこの濁った社会生活の原因が経済的不平等にあると見る。<sup>⑭</sup>財産は元来国民の間で平等に分配されていた。しかし相統権<sup>⑮</sup>「歴史的権利」を伴った所有が現われて以来、不平等が常態となった。<sup>⑯</sup>この経済的不平等は、特にヘスの生きている時代において甚だしい窮状を引き起こしている。「今日支配的になり始めた道義的・肉体的欠乏は、社会の一部の増加する富と一部での増大する貧困とに基づいている。この不調和、この不平等、この利己主義は更に大きくなるだろう。」「工学の發明、日々高まる商工業」も差し当りこの過程を促進するばかりである。中間層は、この「あらゆる仲介業、手工業が、大商業と工業に席を譲らねばならない時代、自由な商工業が遂にあらゆる個人的活動を恐るべき大口で呑込む時代」には消滅するほかない。こうして、少数の富者が多数の持たざる者を支配する状況は極点に達するだろう。今や血統貴族ではなく「貨幣貴族」が進歩の敵である。<sup>⑰</sup>ヘスは、サン・シモンに倣って、この状況を打破するには相統権の廃止が必要であると考える。この相統権の廃止が、やがて本源的な調和と平等の意識的な回復を齎すだろう。<sup>⑱</sup>しかし相統権の廃止から神の国へ至る過程を実現するには二つの道がある。「熱情による盲目的闘争」か、「理解による平和的調停」か。ヘスは社会的不平等がついには衝突を引き起こすことを警告しつつ、調停の道呼びかける。<sup>⑲</sup>また彼は、新しい社会を形成するこの過程が、「政治闘争の国フランス」と「精神的闘争の国」ドイツとの協働によって促進されることを主張して、後の英独仏三国同盟論の走りを示した。

終章「新しいエルサレムと最後の時」は、来るべき神の国、未来像を描く。内面的・外面的な人間の一体性が回復されるこの時代には、治者と被治者の区別の消滅、征服戦争の中止、農村と都市の区別の消失、貧困の一掃、労働と享受の一体化、男女の平等、国家による青年の教育、小共同体の連合としての国家、最終段階での国家の消滅、宗教と政治の統一、立法権と統治権の統一、医療等の保障などが実現されると、ヘスは考えていた。<sup>⑳</sup>

自己流に緋い交せた宗教思想と、相続権の廃止から社会的な自由・平等を展望してみせる社会主義思想とを、大仰な文  
 体で綴り合わせたこの奇妙な書物、『人類の聖史』は、奇跡によって「東西南北のあらゆる民族に受け入れられるだろう」  
 という著者の期待に反して、何の反響も呼ばなかった。後にヘス自身が言っているように、「小さな未熟児は、足跡も残  
 さずに消え去った」<sup>②</sup>のである。しかし反響の如何に拘らず、ヘスのこの処女作がドイツ社会主義の最も初期的な表現の一  
 つであったという事実には変りはない。

- ① Vgl. Silberner, a. a. O., S. 31.
- ② Ebenda, S. 49 f.
- ③ Die heilige Geschichte der Menschheit, Moses Hess, *Philoso-  
 phische und sozialistische Schriften, 1837-1850*, Hrsg. von A. Cornu  
 und W. Mönke, Berlin 1961 (Zur HS. 24論註) S. 58.
- ④ Ebenda, S. 45.
- ⑤ Ebenda, S. 47 ff.
- ⑥ Vgl. Ebenda, S. 42.
- ⑦ Ebenda, S. 15, 48.
- ⑧ Ebenda, S. 7, 9, 17, 18, 48.
- ⑨ Ebenda, S. 18, 19, 20, 24, 28.
- ⑩ Ebenda, S. 31, 35.
- ⑪ Ebenda, S. 33, 47.
- ⑫ Ebenda, S. 63.
- ⑬ Ebenda, S. 60.
- ⑭ Ebenda, S. 9, 48, 52, 54.
- ⑮ Ebenda, S. 61 ff.
- ⑯ Ebenda, S. 53, 56.
- ⑰ Ebenda, S. 44 f., 60.
- ⑱ Ebenda, S. 65.
- ⑲ Ebenda, S. 66 ff.
- ⑳ Silberner, a. a. O., S. 31. 47引用。
- ㉑ HS, S. 290.

三

『人類の聖史』を脱稿したヘスは、研究一本に打ち込む決意をし、一八三七年五月ボン大学へ入学した。彼は同大学に  
 一八三八／三九年の冬学期まで在籍する。しかし哲学を専攻したこと以外大学での様子は明らかではない。ボン大学への  
 入学は、ヘスの期待に反して、生活の画期とはならなかった。父親との気まずい関係は相変らず続き、彼は、出版業への

就職を計画するなど、経済的独立の画策を続ける。また研究生活においても、大学を正式に卒業しなかったことで、彼は名実共に独学者に留まった<sup>⑥</sup>。しかし一八三〇年代末のヘスは、もはや孤立した思想家ではなかった。

一八三八年ヘスは、前年にケルン司教逮捕にまで至ったプロイセン政府とカトリック教会との紛争に刺激されて原稿を書き始め、翌三九年その一部を『国家と教会』と題する論説に仕上げた。彼はこの論説の一部に流用しながら、一八四〇年初め、『ヨーロッパの再生』と題する著作に取り掛かった。彼のこの第二作は、表題を『ヨーロッパ三頭政治』と改めて、翌四一年一月、ライプツィヒのヴィーガンツのもとから出版された<sup>④</sup>。

ヘスのこの著作は、表題の如く、イギリス、フランス、ドイツの三国同盟によるヨーロッパの再生をテーマとしている。ヘスは、ヨーロッパを「聖地」「神の特別の保護のもとにある選ばれた大陸」と見做す。ヨーロッパは、現在確かに分裂状態であるが、統一の萌芽を内蔵している。彼は、分裂の中で迫り来る「全ヨーロッパ戦争」の彼方に「全ヨーロッパ同盟」を展望する。将来のその有機的に構成されたヨーロッパにおいては、イギリス、フランス、ドイツの国民が先頭に立つ<sup>⑤</sup>。

ヘスは、この三国同盟論を基礎付けるため、ドイツ、フランス、イギリスの国民性を持ち出す。ドイツ人は、観念論者であり、あらゆるものから認識を引き出す。これに対して、イギリス人は、唯物論者で、あらゆるものから便益を引き出す。フランス人は、両者の中間で揺れ動いている。またドイツの瞑想的な静止と内面性に対しては、フランスの運動と外面性が対しており、イギリスはこの両者の統一である<sup>⑥</sup>。このように性格が両極端の傾向を代表し、互いに対立している三つの国民が相互に理解し合い、協働するときのみ、統一ヨーロッパは生成する<sup>⑦</sup>。

ヘスは更にこの議論を歴史の流れに沿って捉え返す。知力の支配的なドイツにおいて、まず第一の革命、宗教改革が起こり、精神の自由を確保する動きが始まった。次いで第二の革命、フランス革命によって習俗の自由が始まる。やがて実践的感覚が発達したイギリスで第三の社会革命が起こり、貧富の対立が解消され、完全な自由が実現されるであろう。イ

ギリス、フランス、ドイツの国民は、その国民性に見合った持場で、近代の自由を求める運動に協力すべきだ、とヘスは論ずる。<sup>⑧</sup>

この自由の実現過程としての三つの革命についての議論は、またヘスが、宗教、習俗、法律について論ずる場ともなっている。この時代のヘスは、まだ宗教一般の批判へは進んでいない。逆に彼は「愛の宗教」としてのキリスト教を奉じ、国家にもこの宗教の保護奨励を要求する。しかし彼はキリスト教と教会を同一視せず、国家が特定の宗派と結びつくことを非とする。<sup>⑨</sup> このような観点から、ヘスは、形式化し権威化した教会への反抗としての宗教改革を、精神の自由を告げる第一革命と捉えたのである。<sup>⑩</sup>

習俗の解放としてのフランス革命は、この精神の解放の必然的な結果である。ヘスはフランス革命が「政治的・社会的」なものであるという考えを退けて、教会の手を経ない民事結婚の導入をその本質とする習俗の自由化と見た。<sup>⑪</sup> ヘスはまた、民事結婚の導入を、ユダヤ人問題解決の基本的な手段と考えていた。<sup>⑫</sup>

第三の事項、法律は、「歴史的権利からの法律の解放」<sup>⑬</sup>が社会革命の内実をなすという形で問題となる。ヘスはこのよ  
うな言い回しで相統権の廃止を示唆したのである。彼は、相統権の廃止を内容とする社会革命が、貧窮と貨幣貴族の対立から革命的突発へとという形で起こると見做した。しかしイギリスにおいてのみこの対立は極点に達するとし、ドイツは社会革命の成果のみを平穩に獲得しようと予測していた。<sup>⑭</sup>

ヘスが以上のような議論を背景にその必然性を説いたイギリス、フランス、ドイツの三頭支配下の「ゲルマン的・ローマのヨーロッパ」は、外に向っては、イギリスを代表者としてロシアと対峙するという形を取る。この対決は、ロシアがヨーロッパ文明を受容するまで続くのである。<sup>⑮</sup>

ヘスの三国同盟論は、本来歴史的遠望であって、時事問題としての外交を論じたものではない。しかし彼は、『ヨーロ

『三頭政治』に、一八三九年に出版され評判となった『ヨーロッパ五頭政治』——ロシアとオーストリアの下でのヨーロッパの同盟を提案——への反論という形、東方問題に関して一八四〇年七月十五日にイギリス、ロシア、オーストリア、プロイセンの間で結ばれたロンドン条約がエジプトを支持するフランスを孤立に追い込んだことから生じた、フランスとプロイセンとの緊張というアクチュアルな事態への論評という形を付け加えるのを忘れなかった。<sup>16</sup> 時流に棹さそうとする意図が幸いしてか、『ヨーロッパ三頭政治』は、処女作とは違って成功を収め、ヘスに文名を齎した。

しかし『ヨーロッパ三頭政治』には、トリアルヒー理論を展開してのちの哲学的社会主義の一つの基礎を与えたこと以外に、もう一つ言及しておかねばならない面がある。それは、この著作で、ヘスがヘーゲル派に対する態度を明らかにしていることである。

ヘスはヘーゲル哲学をドイツ哲学の最終的成果であると評価する。しかし彼はヘーゲル学派に与しない。<sup>17</sup> 彼はヘーゲル哲学を、「思惟の哲学」「過去の哲学」と見做す。ヘーゲル哲学は、あらゆるものを観念的に含んでいる。しかし行為、観念の現実化を内包してはいない。このことはヘーゲル哲学が過去の哲学であることに対応している。ヘーゲル哲学は、既に起きたことを整合的に説明することに終始してきた。<sup>18</sup> ヘスはこのヘーゲル哲学に「未来の哲学」「行為の哲学」を対置する。彼は、哲学が過去と現在から未来の姿を推論するという作業に踏み切ることによって、歴史哲学の課題を完全に果し、更にそのことによって、人間に行動の指針を与え自覚的行為へと導く「行為の哲学」となることを要求する。<sup>19</sup>

ヘスのこのような考えの背後には、処女作以来の「人類の歴史全体が神聖である」という考えがある。『三頭政治』においては、歴史の主体でありかつ法則である神を「世界精神」と改名するなど、ヘーゲル哲学の用語を使っているが、世界は神、永遠の理法が支配する過程であり、人間はその法則を意識化してゆくという形で歴史に参与する位置にあり、その意識化は三段階を経て深まってゆくといった歴史に対する基本的見方は変っていない。<sup>20</sup> 自然と同様無意識的に理法に

支配される状態から出発して、歴史の中で徐々に神、理法を意識化し、それに従う行動を強化してゆくことが、まさに人間の自由の進展してゆく過程であると考えていた<sup>①</sup>ヘスが、過去から未来への歴史の流れを認識する歴史の哲学、更にまた行為の哲学を求めるのは自然なことであった。

ヘスは、以上のような行為の哲学についての彼の立場が、最初に「理論」から「実践」への「行為の哲学」を説いた青年ヘーゲル派チェスコフスキーの説を発展させたものであることを認め、自余のヘーゲル左派にも「過去の哲学から行為の哲学への過渡点」という位置を与えた<sup>②</sup>。これに対してヘーゲル哲学解体の体現者である青年ヘーゲル派の側でも、ヘスの『三頭政治』を好意的に受け入れた。ベルリン・ヘーゲル左派の機関誌『アテネウム』の書評は、『三頭政治』の著者を青年ヘーゲル派と同じ立場に立つものと評している<sup>③</sup>。ヘスは以後彼ら青年ヘーゲル派との連繫を強めてゆくことになる。

- ① *NQHf*, S. 10. ヘスの決意のほろむじむは *Heß, Tagebuch*, Mai 1837, *NQHf*, S. 42; *Silberner*, a. a. O., S. 34.
- ② *Silberner*, a. a. O., S. 59 f. Siehe auch *HB*, S. 54.
- ③ ヘスは初等・中等教育の施設には通じてゐた (*Silberner*, a. a. O., S. 6). 一八三五年ボン大学の講義に時折出席し (*Ebenda*, S. 18). 三十年には正式に同大学へ入学するが、学位は取らなかつた (*NQHf*, S. 10). なおヘスは、イデーメンツを日常用語とする家庭に引き籠つてゐたため、二十歳になつても完全なフラインツ語を使へなかつたといふ (*Silberner*, a. a. O., S. 5).
- ④ *Ebenda*, S. 66 f. Siehe auch *HB*, S. 54, 60, 66, 67, 68 f.; *HSt*, S. 93.
- ⑤ *Die europäische Triarchie*, *HSt*, S. 102, 103 f., 108, 109.
- ⑥ *Ebenda*, S. 117, 144 f.
- ⑦ *Ebenda*, S. 160 f.
- ⑧ *Ebenda*, S. 93 ff., 117, 120, 149 f.
- ⑨ *Ebenda*, S. 112 f., 126 f., 133 f.
- ⑩ *Ebenda*, S. 114.
- ⑪ *Ebenda*, S. 117 f., 137 f.
- ⑫ *Ebenda*, S. 143 f. 後にシオニスムの先駆者となるヘスも、青年時代には「同化主義者」であつた。
- ⑬ *Ebenda*, S. 157. Vgl. *Ebenda*, S. 159.
- ⑭ *Ebenda*, S. 159 f.
- ⑮ *Ebenda*, S. 106, 107, 161.
- ⑯ *Ebenda*, S. 150, 162 f., 163 ff.
- ⑰ *Ebenda*, S. 82, 108 f.
- ⑱ *Ebenda*, S. 79, 82, 85, 86.
- ⑲ *Ebenda*, S. 85, 89.
- ⑳ *Ebenda*, S. 80 f., 83, 84, 90 f.
- ㉑ *Ebenda*, S. 80 f., 83 f.
- ㉒ *Ebenda*, S. 82 f.

四

一八三〇年代末に、ヘスの一家は精糖業の成功によって、急速に豊かになった。一家は一八四一年には新しい家に転居する。<sup>①</sup>しかしヘスの父親からの独立の動きはなおも続く。『ヨーロッパ三頭政治』出版後、彼はジャーナリズムへの道を求め始めた。四一年の六月、彼はまず、友人ベルトルト・アウエルバッハ(二八二一—一八八二)の勧めにより、アウグスブルク『一般新聞』編集部に職を得ようとするが、失敗に終る。<sup>②</sup>しかし彼にはもう一つの道が残っていた。

一八四一年夏、ケルンの若い法律家・実業家の間で株式に基づく新聞社(『ライン新聞』)を設立する動きが始まった。その先頭に立っていたのは、ゲオルク・ユング(二八一四—一八八六)である。<sup>③</sup>予てヘスと親交があり、且つ思想的には青年ヘーゲル派であったユングは、ヘスが『一般新聞』へ就職願を出したのと同じ頃、編集長にするという条件で彼を新しい新聞の創刊運動に誘っていた。『一般新聞』から回答がなかったのを機に、ヘスは創刊運動に加わり、株主や寄稿家を募る運動の中心となって活動することになる。<sup>④</sup>しかしヘスの創刊運動での努力は報いられなかった。既に十月、株主達はフリードリヒ・リストに編集長を依頼し、ヘスは副編集者に降格された。リストが足の骨折を理由に申し出を断ったあとも事態は変らなかつた。<sup>⑤</sup>一二月六日、八日、一〇日にケルンで『ライン新聞』の株主総会が開催される。ヘスは、八日の総会で、ユングらの反対のため、定款の追加条項によって編集者としての地位の保障を得るのに失敗し、また十日の総会では監査委員の選挙に落選した。<sup>⑥</sup>彼は、新聞の理事に選出されたユングやその他の役員連に対して一時怒りを爆発させる。しかし彼は、結局、自由に仕事をさせるというユングが提示した条件を受け入れて、編集部に入り、ドイツ関係の記事を引きうけた編集長グフタフ・ヘフケン、イギリス関係の記事を扱うベルンハルト・ラーヴェという編集員と並んで、フランス関係の記事の編集に携わることになった。<sup>⑦</sup>

一八四二年一月一日『ライン新聞』創刊。しかし翌日から編集方針についての対立が表面化する。一月二日、まずヘスが編集長ヘフケンの傾向を不満として編集部を離れた。<sup>⑮</sup> 続いてヘフケンと理事ユングとの間に、ブルーノ・パウアーの記事の掲載をめぐる争いが生じ、遂に一月十八日ヘフケンは編集長辞任に追い込まれた。<sup>⑯</sup> ヘスは直ちに編集部へ復帰している。<sup>⑰</sup> 関税同盟の推進などの経済問題に関心を集中しようとするヘフケン（思想的にはリストの信奉者）と『ハレ年誌』（一八四一年六月以後『ドイツ年誌』）風の政治・文芸新聞を目差すユング、ヘスとの対立は、後者の勝利に終わった。<sup>⑱</sup> この後『ライン新聞』は、二月に後任編集長としてベルリンの青年ヘーゲル派からアドルフ・ルーテンベルクを迎え、ヘーゲル左派の色合を一層深めてゆく。

ヘスは『ライン新聞』に一〇〇余の記事を書いた。<sup>⑲</sup> その中へ彼は自らの考えを挿入していった。『ライン新聞』時代のヘスの大きな変化は、宗教と国家の分離を要求する立場へ移ったことである。彼は青年ヘーゲル派に同調して、国家を、宗教の上ではなく、「理性と人倫の上に立てなくてはならない」と考えるようになった。<sup>⑳</sup> 一方、トリアルヒー（三国同盟）理論の枠組は、この時代にも変えていない。彼は、「精神の、習俗の、政治の自由は、切り離しえないが、ドイツは、『……]就中精神の解放を完成し、生活へ導入することを課題とする」ことを主張し、『ライン新聞』の一般的要求であった出版の自由の要求を、理論的なドイツと実践的なフランスという議論に絡めて展開した。更にイギリスでは「貨幣貴族と貧窮の対立」という社会問題を原因とする破局が迫っていることを論じている。<sup>㉑</sup> しかし四二年のヘスは、社会問題を論じる際、それが政治形態の変革によって解決しうる問題ではないという論調を強めており、更に共産主義を紹介する作業へも進んでゆく。<sup>㉒</sup> このような傾向は、明らかに『ライン新聞』の一般的傾向とは一致していなかった。

『ライン新聞』のサークルにおけるヘスの勢力の弱さは、<sup>㉓</sup> このように青年ヘーゲル派とは異質な部分を含んでいる彼の

思想に照応していた。恐らく一八四二年の秋には、ヘスに哲学的共産主義者の自覚を齎していたと思われる彼の思想は、まだ人々の受け入れるところではなかったのである。この『ライン新聞』時代のヘスとマルクスの出会も、その例である。ヘスは既に四一年の創刊活動の時マルクスと知り合い、その哲学的才能を大いに評価していた。<sup>④</sup> 四二年十月編集長ルーテンベルクが当局の圧力で辞任し、後任の編集長としてマルクスがケルンへやって来た。しかし当時のマルクスはヘーゲル法哲学を視座にもを見る青年ヘーゲル派であった。編集長就任早々『ライン新聞』は共産主義の理論的現実性を認めておらず、ましてその実現は望んでいないと宣言し、ベルリン・ヘーゲル左派からの「無神論や共産主義といったものを混入した」論説を没にし始めたマルクスに、ヘスは影響を及ぼすどころではなかった。

しかしヘスはエンゲルスの説得に成功している。エンゲルスは、四二年十月ベルリンからの帰郷の途中、十一月末マンチェスターへ赴く途中の二度、『ライン新聞』社を訪れた。彼はこれらの機会にヘスと時事問題について話し合い、「熱烈な共産主義者として」彼と別れ、イギリスへ渡っていった。<sup>⑤</sup>

一八四二年十二月半ば、ヘスも国外へ出ることになる。彼は、『ライン新聞』特派員としてパリへ赴き、翌四三年三月三十一日を以って『ライン新聞』が廃刊になるまで通信文を送り続けた。そのかたわら、彼は、当時パリの義人同盟を指揮していたヘルマン・エーヴァアーベック(一八一六一八六〇)やゲルマン・モイラー(一八一三一一八八二頃)と接触を始め、またカベール、コンシデラン、デザミール、ルルー、フローラ・トリスタン、ルイ・ブラン、といったフランスの社会主義者・共産主義者を訪ね歩いた。<sup>⑥</sup> ヘスは、この時期にはじめて社会主義・共産主義の活動家達と連絡を持つことになったのである。

① Silbner, a. a. O., S. 92.

② 西南ドイツの文筆家。小説『スピノザ』(一八三七)、スピノザ全集

の翻訳(一八四一)などの著作もある。ユダヤ系で、自らをユダヤ教

徒のドイツ人と見做し、ユダヤ教の改革を主張するという立場を取っていた。政治的傾向は倫理的リベラリズム。一八三七—一八四二年頃。

は、ヘスの最も親密な友人であった。(Silbner, a. a. O., S. 57 f. 等)

③ HR, S. 75, 76 f.

④ J. Hansen, *Gustav von Meußsen*, Bd. 1, Berlin 1906, S. 245 ff.

⑤ HR, S. 75, 77 f.; Silbner, a. a. O., S. 96 f.

- ⑧ Silbner, a. a. O., S. 99.
- ⑨ J. Hansen, *Rheinische Briefe und Akten zur Geschichte der Politischen Bewegung 1830-1850*, Bd. 1, Essen 1909. (Nachdruck 1969), S. 296 f.
- ⑩ HB, S. 84 f., 86, 89.
- ⑪ HB, S. 90.
- ⑫ Hansen, *Meinungen*, Bd. 1, S. 251.
- ⑬ HB, S. 90.
- ⑭ Hansen, *Meinungen*, Bd. 1 S. 250 f.; G. Jung, *Zur Geschichte der Rheinischen Zeitung*, Hansen, *Rheinische Briefe und Akten*, Bd. 1, S. 577 ff.
- ⑮ Silbner 141 f. (大體註文) の記述を参照せよ。 (E. Silbner, *The Works of Moses Hess. An Inventory of his signed and anonymous publications, manuscripts and correspondence*, Leiden 1959.
- ⑯ HS, S. 187, 188.
- ⑰ HS, S. 180 ff., 183 ff., 188 f.
- ⑱ HS, S. 184 f., 191 f.
- ⑲ HS, S. 194. Siehe auch Silbner, *Moses Hess. Geschichte seines Lebens*, S. 116.
- ⑳ Vgl. HS, S. 233, 296.
- ㉑ 大體『ヘスからのパンフレット』に發表された「社会主義と共産主義」として論文で共産主義者を名乗る。 Silbner, a. a. O., S. 124. 以下は同じ論文は四十二年十一月にはホルヴァークの手に渡ったであろう。 管見にふれたかぎりではこれが、ヘスが共産主義者を称した最初の例である。 ただし一八四四年以前には、ヘスの「共産主義」は、普通には社会主義・共産主義と二つの名で呼ばれていた潮流を総称したものである。 「社会主義」「民生主義」とも交換可能な言葉であった。
- ㉒ HB, S. 79 f.
- ㉓ *Karl Marx Friedrich Engels Werke*, Hrsg. von Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED (Zur MEW 2版) Bd. 1, S. 108, Bd. 27, S. 411.
- ㉔ HB, S. 103. エンゲルスが果してヘスの説得だけで共産主義者になつたかどうかは疑問である。 恐らくイギリスでの実見が大きく作用したはずである。 しかしエンゲルスの一八四三—一八四四年の論説からして、ヘスの影響は否定しえない。
- ㉕ Silbner, a. a. O., S. 151 f.

五

『ライン新聞』廃刊後も、ヘスは暫くパリに留まった。彼はユリウス・フレーベルの編集していた『スイス共和主義者』に寄稿する一方、エーヴァーベックらとの交際を続けた。エーヴァーベックは、当時スイスにいたヴァイトリンゲンに、ヘスを、「概念的な」喋り方をして理解しにくいところもあるが有能な人間であると紹介している<sup>①</sup>。しかしヘスは義人同盟

には加わらなかつた。② 四三年五月一日彼はパリを去ってケルンへ戻つた。

時期は前後するが、一八四二年の秋、詩集の成功を祝つて「凱旋旅行」をしていたゲオルク・ヘルヴェークがケルンを訪れた。ヘスはこの時ヘルヴェークと知り合い、チューリッヒで月刊誌を出版する計画を持っていた彼に寄稿を約束、四二年秋から四三年春にかけて、「社会主義と共産主義」「行為の哲学」「唯一絶対の自由を！」の三篇の論文を彼に送つた。しかし計画中の月刊誌はプロイセン政府が事前に搬入を禁止したため挫折し、ヘルヴェークは原稿を四三年七月『イスからの二一ボーゲン』という単行本に纏めて出版した。③

ヘスがこの『二一ボーゲン』の三論文などで展開している四二／四三年冬前後の「行為の哲学」は、『三頭政治』のそれとは様相を異にしている。既に神を失なっていたヘスは、人間の普遍的本性とそれに従つた自由な自己活動とを原理として立てる。ヘスは、自我↓非我↓自己同一性への帰還という流れによって示されている、自我が制限を突破してゆく時の活動性に着目して、彼の原理をフィヒテに倣つて「自我」と呼び、④ また行為は意識的でなければ、自由ではないとして自己活動の出発点としての自由な自己意識の確立を求めた。ヘスが「自己意識」を持ち出しているのは、勿論バウアーに従つてのことである。しかしこの普遍的な主観が抽象に流れるのを嫌つて、ヘスは「自我」「自己意識」が「人間個体」の中でのみ現実性を持つことを、とりわけ強調した。⑤ 「生命理念、普遍的なものを自分の生命として認識する人間が、人間の最高の、あるいは最も完全な現実性である」と述べる時のヘスは、フォイエルバッハに近い姿を見せていた。⑥

この時期のヘスは、以上のように、バウアー、フォイエルバッハを区別せず、青年ヘーゲル派を総体として捉えて理論的支柱に仰ぐという姿勢を取つた。彼は、そのヘーゲル左派を、内面生活の領域で、現実の人間の中に実現されたのではない抽象的な普遍的批判を行ったもの、宗教批判者、神学意識の批判者と評価していた。しかしヘスは単なる宗教批判には満足しない。宗教という欺瞞と政治という欺瞞が互いに支え合っていることを指摘したヘスは、宗教批判の論理を外

的・社会的な生活の領域へも拡大する。<sup>⑧</sup>「宗教と政治の本質は、「……」現実の生命、現実の諸個人の生命をひとつの抽象物に、個人自身の内部以外では現実的でない『普遍者』に吸い取らせることである」「『神事』では僧侶が、また『国事』では国王、貴族、その他の野心家や、利己主義者、道化師、詐欺師が『普遍的』利害の代表者を僭称し、彼らの臣下の血と汗によって生き、犠牲を最高の美徳と言いつらした。」<sup>⑨</sup>

ヘスがこの政治と宗教に対置するのは、精神生活ならびに社会生活におけるいっさいの支配の否定としての「アナルヒー」である。しかしアナルヒーは人間の自己規定まで否定するわけではない。ヘスにとって、アナルヒーとは、彼が原理とした自由な自己活動に対する一切の外的制約が除かれた状態ないしはそのような状態への志向を意味していた。<sup>⑩</sup>

このアナルヒーは、しかし、現実には無神論と共産主義という二つの姿を取って現われている。宗教の支配を否定して精神の自由を求める無神論は、ドイツにおいて、フィヒテから始まって、シェリング、ヘーゲルを経、青年ヘーゲル派へ達するという形で発展した。一方フランスにおいては、政治の支配を否定し、社会的自由を求める共産主義が、バブーフによって始められ、サン・シモン、フーリエを経てブルードンらの社会主義者・共産主義者の教説へと発展した。<sup>⑪</sup>しかしこの二つの流れはまだ合流するには到っていない。ドイツでは精神的自由のみが、フランスでは社会的自由のみが追求されている結果、共存関係にある宗教と政治は、フランスでもドイツでも繰り返し息を吹き返している。<sup>⑫</sup>ヘスは、勿論ドイツとフランスの志向を統合する立場に立つ。

以上のように、この時期のヘスの思考は、内面生活に外面的な社会生活を対置するという二元構造を取っていた。しかし、否むしろそれ故、ヘスは外面生活の諸領域を明確に区別するに到らなかつた。このため、彼は、共産主義を、就中、政治的支配の否定として評価した。そして、その一方で、「自我」「自己意識」の自由な活動の固定・制限、享受と活動との分離などを齎すという原理的面から批判した「物質的所有」<sup>⑬</sup>と、政治的支配との連関を明瞭にできずにいた。

以上のような議論を中心にドイツ哲学とフランス社会主義の結合を図ったヘスの三論文によって基調を与えられていた『スイスからの二一ボーゲン』は、出版直後、フレレーベルのリテラーリッシュェス・コントワールの他の出版物とともに、チューリッヒ当局によって押収された。更に、六月九日にチューリッヒで逮捕されたヴァイトリングのもとで押収された、先述のエーヴァーベックの手紙を含む書類・書簡が、同じ七月『ブルンチリ報告書』という形で公表されている。これらの材料は、ドイツ滞在をできるだけ早く切り上げようとしていたヘスの不安を、更に掻き立てたにちがいない。折しも、七月末、ドレスデンからパリへ向う途中のアルノルト・ルーゲが、旧『ライン新聞』関係者から、彼がマルクスとともに出版を計画していた『独仏年誌』へ支援を取りつけるために、ケルンへ立ち寄った。ヘスは、ルーゲと談合の結果、八月はじめ、彼とともにケルンを去り、ブリュッセルを経てパリへ向った。

ヘスとルーゲは、八月九日朝パリに到着した。ケルンを出発する前に、一八四二年秋から『ケルン新聞』の文芸欄の編集を担当していた友人ヘルマン・ピュットマン(二八一—一八七四)を通じて同紙のパリ通信員の地位を手に入れていたヘスは、四三年末まで、社会主義者・共産主義者の動向を含めて、フランスの情勢の報告を、パリから送っている。これらの通信記事の論調からは、この四三年秋に、ヘスがフォイエルバッハへの依存を強めていたことが看取される。

ヘスは『ケルン新聞』等への通信活動で生計を立てる一方、ルーゲとマルクスの『独仏年誌』創刊の準備にも協力した。彼は、パリ到着の翌日、ルーゲとともに、カペーを訪問したのを手始めに、『独仏年誌』にフランス人の寄稿者を獲得する計画のルーゲを、コンシデラン、フローラ・トリスタン、デサミーらに紹介した。十月末『独仏年誌』のもう一人の編集者マルクスも、クロイツナハからパリへ到着、『年誌』の準備は一段と進捗する。こうして、ヘスは再びマルクスとドイツ人「亡命者」グループという狭いサークル内で、顔つき合わせることになった。そして四二年後半の出会いとは異なって、今度は、マルクスの共産主義への傾斜に、無視できない影響を与えた。

一八四四年はじめ、ヘスは金に困って再びケルンへ戻る。彼はパリから去る前に『独仏年誌』の編集部に数篇の論説を手渡していた。ルーゲとマルクスの対立のため『年誌』は、四四年二月末に出版された第一・二合併号のみで廃刊となり、ヘスの論説のうち、「パリからの手紙」だけが、この雑誌で日の目を見る。

- ① J. C. Bluntschli, *Die Kommunisten in der Schweiz nach den bei Welling vorgefundenen Papieren*, Zurich 1843 (Nachdruck 1972), S. 83.
- ② HS, S. 298.
- ③ Silbner, a. a. O., S. 120 f., 123.
- ④ Philosophie der Tat, HS, S. 210 f.
- ⑤ Was wir wollen, HS, S. 236 f., 241.
- ⑥ Ebenda, S. 237; Philosophie der Tat, HS, S. 212.
- ⑦ ヘスは既に一八四二年前半に「真の人間は、類の生活のみを生かすのであって、個人としての特殊な存在と普遍的な存在とを切り離なら」(HS, S. 176) という形でフカイネルマンの議論を援用していた。
- ⑧ Philosophie der Tat, HS, S. 212 ff.
- ⑨ Ebenda, S. 215.
- ⑩ Ebenda, S. 216, 222.
- ⑪ Ebenda, S. 221 ff.; Heß, Sozialismus und Kommunismus, HS, S. 199 ff.
- ⑫ Ebenda, S. 216; Philosophie der Tat, HS, S. 216, 220.
- ⑬ Ebenda, S. 219 f., 224 f.
- ⑭ Silbner, a. a. O., S. 124.
- ⑮ HB, S. 103.
- ⑯ Hansen, *Rheinische Briefe und Akten*, Bd. 1, S. 587, Anm. 2, S. 622 f., Anm. 2.
- ⑰ Silbner, a. a. O., S. 159 f., 157 f.
- ⑱ HS, S. 251. Vgl. auch Heß, *Qu'est ce que la Propriété? Par P. J. Proudhon*, HS, S. 258 f., 260.
- ⑲ Silbner, a. a. O., S. 162 f.

## 六

パリからケルンへ戻ったヘスは、一八四四年三月はじめ、当局の監視下に入った<sup>①</sup>。彼は暫く鳴りを静めて、著述に専心した。彼がこの時期に執筆した論説は、カール・グリューンの編集していた『シュプレヒャー』(四四年六月二日号に「人間の規定」、四四年一二月に出版された)、ユットマン編集の『ドイツェス・ビュルガーブーフ』(「現代社会の窮状とその除去について」など)、パリのドイツ語新聞『前進!』(四四年一二月二日、二八日号に「問答形式の共産主義の信条」の一部)、一八

四五年五月に出版されたグリーン編集の『ノイエ・アネクドータ』（「進歩と発展」、「ドイツにおける社会主義運動について」）に発表され、また単行本として『最後の哲学者達』一八四五年七月出版されている。これらの種々の著作は、ヘスがパリ滞在中に『独仏年誌』編集部に手渡した論文の中に含まれていた「貨幣制について」と題する作品（発表されたのは、一八四五年夏に出版されたピュットマン編集の『社会改革のためのライン年誌』において）とともに、四四年の時点におけるヘスの「社会主義の哲学的基礎付け」「真の社会主義的観点」を明らかにしている。

一八四四年のヘスは、理論的な支えを完全にフォイエルバッハに移し、自ら理論的支柱がフォイエルバッハにあることを明らかにしている。<sup>④</sup>しかし、それは、フォイエルバッハの主体概念、「人間」「類的存在」を、諸個人の「協働」「交通」と捉え返した上でのことである。「人間の本質、フォイエルバッハはそれを幾分神秘化して『類的存在』と表現しているが、それは諸個人の協働である。」<sup>⑤</sup>

ヘスは協働を人間の本質と見るが、しかしその本質が最初から完成され出来上っているものとは考えていない。人間の本質、人類（|| Menschheit || 人間性）にも、他の有機体と同様、構成要素がぶつかり合い、闘争し合う発生期がある。人類の歴史も今、諸個人が敵対し合う、そのような発生期を経過している。人間はその期間には「個別化の中での交通という矛盾」に苦しむ。<sup>⑥</sup>

ところでヘスは、フォイエルバッハの宗教批判の論理を援用して、キリスト教と市民社会（彼の言う「小商人世界」）の状況を次のようにアナログスに捉えている。キリスト教は、類と、類の現実的担い手である個を切り離して、類を神として自立化させ、個は天国においてこの神に与えることにより永遠の生を得ると説く。キリスト教は、類を手段に貶め個を目的とする顛倒した世界の理論である。これに対してこの顛倒した世界の実践が小商人世界である。「ここでの類的生活は貨幣である。顛倒した世界の理論的生活にとって神にあたるのは、その実践的生活にとっては貨幣である。すなわち貨幣は

人間の外化された能力である。」<sup>⑦</sup>

ヘスは、この、実は人間自身の血肉である貨幣を求めて人間が自らの能力、活動を自由意志で売買している状況を、「一般的な奴隸制」「社会的動物界」などと呼ぶ<sup>⑧</sup>。古代に強盗殺人と奴隸制という形で始まった不自然な矛盾した交通と協働が中世の農奴制を経て、この「普遍的な奴隸制、つまり今日の小商人の、全般的な、相互の、自由意志による人身売買」へと発展してきた<sup>⑨</sup>。キリスト教は、この普遍的奴隸制の発展に際して、地上と天上、肉体と魂を区別することで肉体の売買を正当化するという形で、また人間の類的能力を神として外化し、孤立した個人を真の人間と称することによって、貨幣を媒介としてしか結合できない個人を原理へと高めるといふ形で、小商人世界を聖別したのである<sup>⑩</sup>。

しかし個別化の中の交通という矛盾が現代の小商人世界へと極大化するこの過程は、同時にこの矛盾を解決するための条件を準備する過程でもあった。「人間の能力、生産力は、疎外の間、高められた。」今や人間の能力は過剰になるほどの発展を示している<sup>⑪</sup>。ヘスは、この生産力を基礎に、教育と労働の組織化という方策によって、対立の時代「人類の発生期に終止符を打ち、新しい「有機的な共同社会」を建設することを呼びかける<sup>⑫</sup>。

以上のようなヘスの考えと、一八四四年頃のマルクス、エンゲルスの思想との類似性は否めないところである。エンゲルスは、既に一八四三年の終りに、ヘスを、ドイツにおける哲学的共産主義の流れの中の「事実上最初の共産主義者」と呼んでいた<sup>⑬</sup>。エンゲルスのこの評価の裏には、彼がヘスと共有していた、ドイツは哲学革命、フランスは政治革命、イギリスは社会革命というトリアルヒー理論<sup>⑭</sup>、共産主義をドイツ哲学の必然的帰結と見る考え<sup>⑮</sup>、キリスト教を現代社会の虚偽の原型と見做し、これを攻撃する論理をフォイエルバッハに求める態度<sup>⑯</sup>などがあった。

一方マルクスも、『経哲手稿』の序言で、ヘスの『「一ボーゲン」』の論文を、国民経済学の「内容のある独創的な著作」の一つに数えている<sup>⑰</sup>。彼は、自らの疎外論の先駆を、ヘスの自由な活動を阻止し固定化する物質的所有云々という議論に見て

いたのである。そればかりではない。彼は、フォイエルバッハを理論的な支えとする態度、市民社会の像、「粗野な共産主義」についてのイメージなどで、ヘスとの類似性を示している。またトリアルヒーの図式も、マルクスに欠けていなかった。②

以上のような思想の類似性の上に立って、ヘスは、エンゲルスとは一八四三年から、マルクスとは一八四四年ははじめから、哲学的社会主義の仲間として連繫していた。③ 一八四五年に入ってもこの関係は続く。四五年二月、前年の六月のシュレーゲン蜂起、それに対応するため一〇月から始まった「労働者階級福祉協会」設立運動などによって「社会問題」「共産主義」への関心が高まったのを捉えて、ヘスは、前年一月にイギリスから故郷へ戻っていたエンゲルス、画家のアドルフ・ケットゲン（一八〇五—一八八二）とともに、エルバーフェルトで共産主義についての講演会を催している。集会は、二月八日、一五日、二二日と続いて、延べ数で約三〇〇人を動員したが、当局の圧力を招いて終った。④ この運動と並んで、ヘスとエンゲルスは四五年一月頃から、「社会的貧困とブルジョワ体制を叙述する」ための月刊誌『ゲゼルシャフツシュピーゲル』の出版計画を進めていた。⑤ 四五年三月ヘスは、この雑誌の出版地と決まったエルバーフェルトに居を移し、エンゲルスとともに編集を始めた。四月にエンゲルスはブリュッセルへ去り、編集はヘスの手に残された。第一号は、予定より遅れて五月に出版されている。⑥ ヘスは、その後、『ゲゼルシャフツシュピーゲル』を第三号までエルバーフェルトで編集した。しかし一八四五年八月末か九月はじめ同誌を手紙によって編集する体制を整えて、彼は、マルクス、エンゲルスのいるブリュッセルへ向う。⑦

① Stibener, a. a. O., S. 193.

② Heß, Doctore Graziano oder Doktor Arnold Ruge in Paris, *Die Gesellschaftlfr*, Jg. 8, 1931, Bd. 1, S. 178f.

③ HS, S. 300, 324. ヘスは、一八四四年には共産主義・社会主義の総称を「共産主義」という表現を通俗的と見做して、「社会主義」へと変えている。しかし一八四五年に入ると彼は社会主義とは異質のも

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

② Fortschritt und Entwicklung, HS, S. 283; Über die sozialistische Bewegung in Deutschland, HS, S. 292f. ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

③ Über die sozialistische Bewegung in Deutschland, HS, S. 287,

- 293 f. Vgl. Bestimmung des Menschen, *HS*, S. 275; Über das Geldwesen, *HS*, S. 330 f., etc.
- ② Ebenda, S. 331 f. Vgl. Fortschritt und Entwicklung, *HS*, S. 281 ff.
- ③ Über das Geldwesen, *HS*, S. 334 f. Siehe auch Über die sozialistische Bewegung in Deutschland, *HS*, S. 293; Über die Not in unserer Gesellschaft und deren Abhilfe, *HS*, S. 314, 318; Die letzten Philosophen, *HS*, S. 385, etc.
- ④ Über das Geldwesen, *HS*, S. 333, 335, 337, 342, 345; Die letzten Philosophen, *HS*, S. 387 f.
- ⑤ Über das Geldwesen, *HS*, S. 333, 336 f. Siehe auch Die letzten Philosophen, *HS*, S. 388 f.
- ⑥ Über das Geldwesen, *HS*, S. 336 f., 338 f. Vgl. Die letzten Philosophen, *HS*, S. 382 f.
- ⑦ Über das Geldwesen, *HS*, S. 332 f., 347 f. Vgl. Bestimmung des Menschen, *HS*, S. 277; Über die Not in unserer Gesellschaft und deren Abhilfe, *HS*, S. 313 f.
- ⑧ Fortschritt und Entwicklung, *HS*, S. 283 f.; Über die Not in unserer Gesellschaft und deren Abhilfe, *HS*, S. 314 f., 319; Kommunistisches Bekenntnis in Fragen und Antworten, *HS*, S. 364.
- ⑨ *MEW*, Bd. 1, S. 494.
- ⑩ *MEW*, Bd. 1, S. 550 ff. Siehe auch *MEW*, Bd. 1, S. 480 f.
- ⑪ *MEW*, Bd. 1, S. 481, 494.
- ⑫ *MEW*, Bd. 1, S. 543 f. Siehe auch *MEW*, Bd. 1, S. 556 f.
- ⑬ *Karl Marx/Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe* (2<sup>te</sup> *MEGA* <sup>1</sup>版), Erste Abteilung, Bd. 3, S. 33 f.
- ⑭ *MEGA*, I. Abt., Bd. 3, S. 34, 151. Siehe auch *MEW*, Bd. 2, S. 132.
- ⑮ Vgl. *MEW*, Bd. 2, S. 120, etc.
- ⑯ *MEGA*, I. Abt., Bd. 3, S. 111 ff. & *HS*, S. 205, 323 ff.; *NQHF*, S. 49 f. <sup>1)</sup> <sup>2)</sup>
- ⑰ *MEGA*, I. Abt., Bd. 3, S. 134.
- ⑱ Vgl. *HB*, S. 103; *NQHF*, S. 92 ff.
- ⑲ <sup>1)</sup> <sup>2)</sup> <sup>3)</sup> <sup>4)</sup> <sup>5)</sup> <sup>6)</sup> <sup>7)</sup> <sup>8)</sup> <sup>9)</sup> <sup>10)</sup> <sup>11)</sup> <sup>12)</sup> <sup>13)</sup> <sup>14)</sup> <sup>15)</sup> <sup>16)</sup> <sup>17)</sup> <sup>18)</sup> <sup>19)</sup> <sup>20)</sup> <sup>21)</sup> <sup>22)</sup> <sup>23)</sup> <sup>24)</sup> <sup>25)</sup> <sup>26)</sup> <sup>27)</sup> <sup>28)</sup> <sup>29)</sup> <sup>30)</sup> <sup>31)</sup> <sup>32)</sup> <sup>33)</sup> <sup>34)</sup> <sup>35)</sup> <sup>36)</sup> <sup>37)</sup> <sup>38)</sup> <sup>39)</sup> <sup>40)</sup> <sup>41)</sup> <sup>42)</sup> <sup>43)</sup> <sup>44)</sup> <sup>45)</sup> <sup>46)</sup> <sup>47)</sup> <sup>48)</sup> <sup>49)</sup> <sup>50)</sup> <sup>51)</sup> <sup>52)</sup> <sup>53)</sup> <sup>54)</sup> <sup>55)</sup> <sup>56)</sup> <sup>57)</sup> <sup>58)</sup> <sup>59)</sup> <sup>60)</sup> <sup>61)</sup> <sup>62)</sup> <sup>63)</sup> <sup>64)</sup> <sup>65)</sup> <sup>66)</sup> <sup>67)</sup> <sup>68)</sup> <sup>69)</sup> <sup>70)</sup> <sup>71)</sup> <sup>72)</sup> <sup>73)</sup> <sup>74)</sup> <sup>75)</sup> <sup>76)</sup> <sup>77)</sup> <sup>78)</sup> <sup>79)</sup> <sup>80)</sup> <sup>81)</sup> <sup>82)</sup> <sup>83)</sup> <sup>84)</sup> <sup>85)</sup> <sup>86)</sup> <sup>87)</sup> <sup>88)</sup> <sup>89)</sup> <sup>90)</sup> <sup>91)</sup> <sup>92)</sup> <sup>93)</sup> <sup>94)</sup> <sup>95)</sup> <sup>96)</sup> <sup>97)</sup> <sup>98)</sup> <sup>99)</sup> <sup>100)</sup> <sup>101)</sup> <sup>102)</sup> <sup>103)</sup> <sup>104)</sup> <sup>105)</sup> <sup>106)</sup> <sup>107)</sup> <sup>108)</sup> <sup>109)</sup> <sup>110)</sup> <sup>111)</sup> <sup>112)</sup> <sup>113)</sup> <sup>114)</sup> <sup>115)</sup> <sup>116)</sup> <sup>117)</sup> <sup>118)</sup> <sup>119)</sup> <sup>120)</sup> <sup>121)</sup> <sup>122)</sup> <sup>123)</sup> <sup>124)</sup> <sup>125)</sup> <sup>126)</sup> <sup>127)</sup> <sup>128)</sup> <sup>129)</sup> <sup>130)</sup> <sup>131)</sup> <sup>132)</sup> <sup>133)</sup> <sup>134)</sup> <sup>135)</sup> <sup>136)</sup> <sup>137)</sup> <sup>138)</sup> <sup>139)</sup> <sup>140)</sup> <sup>141)</sup> <sup>142)</sup> <sup>143)</sup> <sup>144)</sup> <sup>145)</sup> <sup>146)</sup> <sup>147)</sup> <sup>148)</sup> <sup>149)</sup> <sup>150)</sup> <sup>151)</sup> <sup>152)</sup> <sup>153)</sup> <sup>154)</sup> <sup>155)</sup> <sup>156)</sup> <sup>157)</sup> <sup>158)</sup> <sup>159)</sup> <sup>160)</sup> <sup>161)</sup> <sup>162)</sup> <sup>163)</sup> <sup>164)</sup> <sup>165)</sup> <sup>166)</sup> <sup>167)</sup> <sup>168)</sup> <sup>169)</sup> <sup>170)</sup> <sup>171)</sup> <sup>172)</sup> <sup>173)</sup> <sup>174)</sup> <sup>175)</sup> <sup>176)</sup> <sup>177)</sup> <sup>178)</sup> <sup>179)</sup> <sup>180)</sup> <sup>181)</sup> <sup>182)</sup> <sup>183)</sup> <sup>184)</sup> <sup>185)</sup> <sup>186)</sup> <sup>187)</sup> <sup>188)</sup> <sup>189)</sup> <sup>190)</sup> <sup>191)</sup> <sup>192)</sup> <sup>193)</sup> <sup>194)</sup> <sup>195)</sup> <sup>196)</sup> <sup>197)</sup> <sup>198)</sup> <sup>199)</sup> <sup>200)</sup> <sup>201)</sup> <sup>202)</sup> <sup>203)</sup> <sup>204)</sup> <sup>205)</sup> <sup>206)</sup> <sup>207)</sup> <sup>208)</sup> <sup>209)</sup> <sup>210)</sup> <sup>211)</sup> <sup>212)</sup> <sup>213)</sup> <sup>214)</sup> <sup>215)</sup> <sup>216)</sup> <sup>217)</sup> <sup>218)</sup> <sup>219)</sup> <sup>220)</sup> <sup>221)</sup> <sup>222)</sup> <sup>223)</sup> <sup>224)</sup> <sup>225)</sup> <sup>226)</sup> <sup>227)</sup> <sup>228)</sup> <sup>229)</sup> <sup>230)</sup> <sup>231)</sup> <sup>232)</sup> <sup>233)</sup> <sup>234)</sup> <sup>235)</sup> <sup>236)</sup> <sup>237)</sup> <sup>238)</sup> <sup>239)</sup> <sup>240)</sup> <sup>241)</sup> <sup>242)</sup> <sup>243)</sup> <sup>244)</sup> <sup>245)</sup> <sup>246)</sup> <sup>247)</sup> <sup>248)</sup> <sup>249)</sup> <sup>250)</sup> <sup>251)</sup> <sup>252)</sup> <sup>253)</sup> <sup>254)</sup> <sup>255)</sup> <sup>256)</sup> <sup>257)</sup> <sup>258)</sup> <sup>259)</sup> <sup>260)</sup> <sup>261)</sup> <sup>262)</sup> <sup>263)</sup> <sup>264)</sup> <sup>265)</sup> <sup>266)</sup> <sup>267)</sup> <sup>268)</sup> <sup>269)</sup> <sup>270)</sup> <sup>271)</sup> <sup>272)</sup> <sup>273)</sup> <sup>274)</sup> <sup>275)</sup> <sup>276)</sup> <sup>277)</sup> <sup>278)</sup> <sup>279)</sup> <sup>280)</sup> <sup>281)</sup> <sup>282)</sup> <sup>283)</sup> <sup>284)</sup> <sup>285)</sup> <sup>286)</sup> <sup>287)</sup> <sup>288)</sup> <sup>289)</sup> <sup>290)</sup> <sup>291)</sup> <sup>292)</sup> <sup>293)</sup> <sup>294)</sup> <sup>295)</sup> <sup>296)</sup> <sup>297)</sup> <sup>298)</sup> <sup>299)</sup> <sup>300)</sup> <sup>301)</sup> <sup>302)</sup> <sup>303)</sup> <sup>304)</sup> <sup>305)</sup> <sup>306)</sup> <sup>307)</sup> <sup>308)</sup> <sup>309)</sup> <sup>310)</sup> <sup>311)</sup> <sup>312)</sup> <sup>313)</sup> <sup>314)</sup> <sup>315)</sup> <sup>316)</sup> <sup>317)</sup> <sup>318)</sup> <sup>319)</sup> <sup>320)</sup> <sup>321)</sup> <sup>322)</sup> <sup>323)</sup> <sup>324)</sup> <sup>325)</sup> <sup>326)</sup> <sup>327)</sup> <sup>328)</sup> <sup>329)</sup> <sup>330)</sup> <sup>331)</sup> <sup>332)</sup> <sup>333)</sup> <sup>334)</sup> <sup>335)</sup> <sup>336)</sup> <sup>337)</sup> <sup>338)</sup> <sup>339)</sup> <sup>340)</sup> <sup>341)</sup> <sup>342)</sup> <sup>343)</sup> <sup>344)</sup> <sup>345)</sup> <sup>346)</sup> <sup>347)</sup> <sup>348)</sup> <sup>349)</sup> <sup>350)</sup> <sup>351)</sup> <sup>352)</sup> <sup>353)</sup> <sup>354)</sup> <sup>355)</sup> <sup>356)</sup> <sup>357)</sup> <sup>358)</sup> <sup>359)</sup> <sup>360)</sup> <sup>361)</sup> <sup>362)</sup> <sup>363)</sup> <sup>364)</sup> <sup>365)</sup> <sup>366)</sup> <sup>367)</sup> <sup>368)</sup> <sup>369)</sup> <sup>370)</sup> <sup>371)</sup> <sup>372)</sup> <sup>373)</sup> <sup>374)</sup> <sup>375)</sup> <sup>376)</sup> <sup>377)</sup> <sup>378)</sup> <sup>379)</sup> <sup>380)</sup> <sup>381)</sup> <sup>382)</sup> <sup>383)</sup> <sup>384)</sup> <sup>385)</sup> <sup>386)</sup> <sup>387)</sup> <sup>388)</sup> <sup>389)</sup> <sup>390)</sup> <sup>391)</sup> <sup>392)</sup> <sup>393)</sup> <sup>394)</sup> <sup>395)</sup> <sup>396)</sup> <sup>397)</sup> <sup>398)</sup> <sup>399)</sup> <sup>400)</sup> <sup>401)</sup> <sup>402)</sup> <sup>403)</sup> <sup>404)</sup> <sup>405)</sup> <sup>406)</sup> <sup>407)</sup> <sup>408)</sup> <sup>409)</sup> <sup>410)</sup> <sup>411)</sup> <sup>412)</sup> <sup>413)</sup> <sup>414)</sup> <sup>415)</sup> <sup>416)</sup> <sup>417)</sup> <sup>418)</sup> <sup>419)</sup> <sup>420)</sup> <sup>421)</sup> <sup>422)</sup> <sup>423)</sup> <sup>424)</sup> <sup>425)</sup> <sup>426)</sup> <sup>427)</sup> <sup>428)</sup> <sup>429)</sup> <sup>430)</sup> <sup>431)</sup> <sup>432)</sup> <sup>433)</sup> <sup>434)</sup> <sup>435)</sup> <sup>436)</sup> <sup>437)</sup> <sup>438)</sup> <sup>439)</sup> <sup>440)</sup> <sup>441)</sup> <sup>442)</sup> <sup>443)</sup> <sup>444)</sup> <sup>445)</sup> <sup>446)</sup> <sup>447)</sup> <sup>448)</sup> <sup>449)</sup> <sup>450)</sup> <sup>451)</sup> <sup>452)</sup> <sup>453)</sup> <sup>454)</sup> <sup>455)</sup> <sup>456)</sup> <sup>457)</sup> <sup>458)</sup> <sup>459)</sup> <sup>460)</sup> <sup>461)</sup> <sup>462)</sup> <sup>463)</sup> <sup>464)</sup> <sup>465)</sup> <sup>466)</sup> <sup>467)</sup> <sup>468)</sup> <sup>469)</sup> <sup>470)</sup> <sup>471)</sup> <sup>472)</sup> <sup>473)</sup> <sup>474)</sup> <sup>475)</sup> <sup>476)</sup> <sup>477)</sup> <sup>478)</sup> <sup>479)</sup> <sup>480)</sup> <sup>481)</sup> <sup>482)</sup> <sup>483)</sup> <sup>484)</sup> <sup>485)</sup> <sup>486)</sup> <sup>487)</sup> <sup>488)</sup> <sup>489)</sup> <sup>490)</sup> <sup>491)</sup> <sup>492)</sup> <sup>493)</sup> <sup>494)</sup> <sup>495)</sup> <sup>496)</sup> <sup>497)</sup> <sup>498)</sup> <sup>499)</sup> <sup>500)</sup> <sup>501)</sup> <sup>502)</sup> <sup>503)</sup> <sup>504)</sup> <sup>505)</sup> <sup>506)</sup> <sup>507)</sup> <sup>508)</sup> <sup>509)</sup> <sup>510)</sup> <sup>511)</sup> <sup>512)</sup> <sup>513)</sup> <sup>514)</sup> <sup>515)</sup> <sup>516)</sup> <sup>517)</sup> <sup>518)</sup> <sup>519)</sup> <sup>520)</sup> <sup>521)</sup> <sup>522)</sup> <sup>523)</sup> <sup>524)</sup> <sup>525)</sup> <sup>526)</sup> <sup>527)</sup> <sup>528)</sup> <sup>529)</sup> <sup>530)</sup> <sup>531)</sup> <sup>532)</sup> <sup>533)</sup> <sup>534)</sup> <sup>535)</sup> <sup>536)</sup> <sup>537)</sup> <sup>538)</sup> <sup>539)</sup> <sup>540)</sup> <sup>541)</sup> <sup>542)</sup> <sup>543)</sup> <sup>544)</sup> <sup>545)</sup> <sup>546)</sup> <sup>547)</sup> <sup>548)</sup> <sup>549)</sup> <sup>550)</sup> <sup>551)</sup> <sup>552)</sup> <sup>553)</sup> <sup>554)</sup> <sup>555)</sup> <sup>556)</sup> <sup>557)</sup> <sup>558)</sup> <sup>559)</sup> <sup>560)</sup> <sup>561)</sup> <sup>562)</sup> <sup>563)</sup> <sup>564)</sup> <sup>565)</sup> <sup>566)</sup> <sup>567)</sup> <sup>568)</sup> <sup>569)</sup> <sup>570)</sup> <sup>571)</sup> <sup>572)</sup> <sup>573)</sup> <sup>574)</sup> <sup>575)</sup> <sup>576)</sup> <sup>577)</sup> <sup>578)</sup> <sup>579)</sup> <sup>580)</sup> <sup>581)</sup> <sup>582)</sup> <sup>583)</sup> <sup>584)</sup> <sup>585)</sup> <sup>586)</sup> <sup>587)</sup> <sup>588)</sup> <sup>589)</sup> <sup>590)</sup> <sup>591)</sup> <sup>592)</sup> <sup>593)</sup> <sup>594)</sup> <sup>595)</sup> <sup>596)</sup> <sup>597)</sup> <sup>598)</sup> <sup>599)</sup> <sup>600)</sup> <sup>601)</sup> <sup>602)</sup> <sup>603)</sup> <sup>604)</sup> <sup>605)</sup> <sup>606)</sup> <sup>607)</sup> <sup>608)</sup> <sup>609)</sup> <sup>610)</sup> <sup>611)</sup> <sup>612)</sup> <sup>613)</sup> <sup>614)</sup> <sup>615)</sup> <sup>616)</sup> <sup>617)</sup> <sup>618)</sup> <sup>619)</sup> <sup>620)</sup> <sup>621)</sup> <sup>622)</sup> <sup>623)</sup> <sup>624)</sup> <sup>625)</sup> <sup>626)</sup> <sup>627)</sup> <sup>628)</sup> <sup>629)</sup> <sup>630)</sup> <sup>631)</sup> <sup>632)</sup> <sup>633)</sup> <sup>634)</sup> <sup>635)</sup> <sup>636)</sup> <sup>637)</sup> <sup>638)</sup> <sup>639)</sup> <sup>640)</sup> <sup>641)</sup> <sup>642)</sup> <sup>643)</sup> <sup>644)</sup> <sup>645)</sup> <sup>646)</sup> <sup>647)</sup> <sup>648)</sup> <sup>649)</sup> <sup>650)</sup> <sup>651)</sup> <sup>652)</sup> <sup>653)</sup> <sup>654)</sup> <sup>655)</sup> <sup>656)</sup> <sup>657)</sup> <sup>658)</sup> <sup>659)</sup> <sup>660)</sup> <sup>661)</sup> <sup>662)</sup> <sup>663)</sup> <sup>664)</sup> <sup>665)</sup> <sup>666)</sup> <sup>667)</sup> <sup>668)</sup> <sup>669)</sup> <sup>670)</sup> <sup>671)</sup> <sup>672)</sup> <sup>673)</sup> <sup>674)</sup> <sup>675)</sup> <sup>676)</sup> <sup>677)</sup> <sup>678)</sup> <sup>679)</sup> <sup>680)</sup> <sup>681)</sup> <sup>682)</sup> <sup>683)</sup> <sup>684)</sup> <sup>685)</sup> <sup>686)</sup> <sup>687)</sup> <sup>688)</sup> <sup>689)</sup> <sup>690)</sup> <sup>691)</sup> <sup>692)</sup> <sup>693)</sup> <sup>694)</sup> <sup>695)</sup> <sup>696)</sup> <sup>697)</sup> <sup>698)</sup> <sup>699)</sup> <sup>700)</sup> <sup>701)</sup> <sup>702)</sup> <sup>703)</sup> <sup>704)</sup> <sup>705)</sup> <sup>706)</sup> <sup>707)</sup> <sup>708)</sup> <sup>709)</sup> <sup>710)</sup> <sup>711)</sup> <sup>712)</sup> <sup>713)</sup> <sup>714)</sup> <sup>715)</sup> <sup>716)</sup> <sup>717)</sup> <sup>718)</sup> <sup>719)</sup> <sup>720)</sup> <sup>721)</sup> <sup>722)</sup> <sup>723)</sup> <sup>724)</sup> <sup>725)</sup> <sup>726)</sup> <sup>727)</sup> <sup>728)</sup> <sup>729)</sup> <sup>730)</sup> <sup>731)</sup> <sup>732)</sup> <sup>733)</sup> <sup>734)</sup> <sup>735)</sup> <sup>736)</sup> <sup>737)</sup> <sup>738)</sup> <sup>739)</sup> <sup>740)</sup> <sup>741)</sup> <sup>742)</sup> <sup>743)</sup> <sup>744)</sup> <sup>745)</sup> <sup>746)</sup> <sup>747)</sup> <sup>748)</sup> <sup>749)</sup> <sup>750)</sup> <sup>751)</sup> <sup>752)</sup> <sup>753)</sup> <sup>754)</sup> <sup>755)</sup> <sup>756)</sup> <sup>757)</sup> <sup>758)</sup> <sup>759)</sup> <sup>760)</sup> <sup>761)</sup> <sup>762)</sup> <sup>763)</sup> <sup>764)</sup> <sup>765)</sup> <sup>766)</sup> <sup>767)</sup> <sup>768)</sup> <sup>769)</sup> <sup>770)</sup> <sup>771)</sup> <sup>772)</sup> <sup>773)</sup> <sup>774)</sup> <sup>775)</sup> <sup>776)</sup> <sup>777)</sup> <sup>778)</sup> <sup>779)</sup> <sup>780)</sup> <sup>781)</sup> <sup>782)</sup> <sup>783)</sup> <sup>784)</sup> <sup>785)</sup> <sup>786)</sup> <sup>787)</sup> <sup>788)</sup> <sup>789)</sup> <sup>790)</sup> <sup>791)</sup> <sup>792)</sup> <sup>793)</sup> <sup>794)</sup> <sup>795)</sup> <sup>796)</sup> <sup>797)</sup> <sup>798)</sup> <sup>799)</sup> <sup>800)</sup> <sup>801)</sup> <sup>802)</sup> <sup>803)</sup> <sup>804)</sup> <sup>805)</sup> <sup>806)</sup> <sup>807)</sup> <sup>808)</sup> <sup>809)</sup> <sup>810)</sup> <sup>811)</sup> <sup>812)</sup> <sup>813)</sup> <sup>814)</sup> <sup>815)</sup> <sup>816)</sup> <sup>817)</sup> <sup>818)</sup> <sup>819)</sup> <sup>820)</sup> <sup>821)</sup> <sup>822)</sup> <sup>823)</sup> <sup>824)</sup> <sup>825)</sup> <sup>826)</sup> <sup>827)</sup> <sup>828)</sup> <sup>829)</sup> <sup>830)</sup> <sup>831)</sup> <sup>832)</sup> <sup>833)</sup> <sup>834)</sup> <sup>835)</sup> <sup>836)</sup> <sup>837)</sup> <sup>838)</sup> <sup>839)</sup> <sup>840)</sup> <sup>841)</sup> <sup>842)</sup> <sup>843)</sup> <sup>844)</sup> <sup>845)</sup> <sup>846)</sup> <sup>847)</sup> <sup>848)</sup> <sup>849)</sup> <sup>850)</sup> <sup>851)</sup> <sup>852)</sup> <sup>853)</sup> <sup>854)</sup> <sup>855)</sup> <sup>856)</sup> <sup>857)</sup> <sup>858)</sup> <sup>859)</sup> <sup>860)</sup> <sup>861)</sup> <sup>862)</sup> <sup>863)</sup> <sup>864)</sup> <sup>865)</sup> <sup>866)</sup> <sup>867)</sup> <sup>868)</sup> <sup>869)</sup> <sup>870)</sup> <sup>871)</sup> <sup>872)</sup> <sup>873)</sup> <sup>874)</sup> <sup>875)</sup> <sup>876)</sup> <sup>877)</sup> <sup>878)</sup> <sup>879)</sup> <sup>880)</sup> <sup>881)</sup> <sup>882)</sup> <sup>883)</sup> <sup>884)</sup> <sup>885)</sup> <sup>886)</sup> <sup>887)</sup> <sup>888)</sup> <sup>889)</sup> <sup>890)</sup> <sup>891)</sup> <sup>892)</sup> <sup>893)</sup> <sup>894)</sup> <sup>895)</sup> <sup>896)</sup> <sup>897)</sup> <sup>898)</sup> <sup>899)</sup> <sup>900)</sup> <sup>901)</sup> <sup>902)</sup> <sup>903)</sup> <sup>904)</sup> <sup>905)</sup> <sup>906)</sup> <sup>907)</sup> <sup>908)</sup> <sup>909)</sup> <sup>910)</sup> <sup>911)</sup> <sup>912)</sup> <sup>913)</sup> <sup>914)</sup> <sup>915)</sup> <sup>916)</sup> <sup>917)</sup> <sup>918)</sup> <sup>919)</sup> <sup>920)</sup> <sup>921)</sup> <sup>922)</sup> <sup>923)</sup> <sup>924)</sup> <sup>925)</sup> <sup>926)</sup> <sup>927)</sup> <sup>928)</sup> <sup>929)</sup> <sup>930)</sup> <sup>931)</sup> <sup>932)</sup> <sup>933)</sup> <sup>934)</sup> <sup>935)</sup> <sup>936)</sup> <sup>937)</sup> <sup>938)</sup> <sup>939)</sup> <sup>940)</sup> <sup>941)</sup> <sup>942)</sup> <sup>943)</sup> <sup>944)</sup> <sup>945)</sup> <sup>946)</sup> <sup>947)</sup> <sup>948)</sup> <sup>949)</sup> <sup>950)</sup> <sup>951)</sup> <sup>952)</sup> <sup>953)</sup> <sup>954)</sup> <sup>955)</sup> <sup>956)</sup> <sup>957)</sup> <sup>958)</sup> <sup>959)</sup> <sup>960)</sup> <sup>961)</sup> <sup>962)</sup> <sup>963)</sup> <sup>964)</sup> <sup>965)</sup> <sup>966)</sup> <sup>967)</sup> <sup>968)</sup> <sup>969)</sup> <sup>970)</sup> <sup>971)</sup> <sup>972)</sup> <sup>973)</sup> <sup>974)</sup> <sup>975)</sup> <sup>976)</sup> <sup>977)</sup> <sup>978)</sup> <sup>979)</sup> <sup>980)</sup> <sup>981)</sup> <sup>982)</sup> <sup>983)</sup> <sup>984)</sup> <sup>985)</sup> <sup>986)</sup> <sup>987)</sup> <sup>988)</sup> <sup>989)</sup> <sup>990)</sup> <sup>991)</sup> <sup>992)</sup> <sup>993)</sup> <sup>994)</sup> <sup>995)</sup> <sup>996)</sup> <sup>997)</sup> <sup>998)</sup> <sup>999)</sup> <sup>1000)</sup>

ルバツハ的「人間」に視座を取ること、「社会問題」に心を奪われるあまり、政治形態の変革に考慮を払わないことへと向けられた。特に、イギリスの産業的發展やチャーティズムの展開を見し、ドイツの停滞した状況との格差を印象付けられたエンゲルスは、ドイツ社会主義の観念性攻撃、民主主義戦略の称揚において急であった。<sup>①</sup> 四五年半ば、彼らはまず、故郷ヴェストファーレンの社会主義者達と悶着を起し、孤立したカール・グリューンを捉えて、攻撃を始めた。<sup>②</sup>

ヘスがブリュッセルに移り、マルクスらの隣りに居を構えたのは、こうした時期であった。四一年の最初の出会いからマルクスの理論的才能を評価し、四四年からは彼の議論の一部を取り込んでいたヘスは、マルクスらの哲学的社会主義批判の動きに同調した。彼は、「我々と西方の隣人との区別は、彼らが実践的目的、我々が理論的目的を追求していることにあるのではない。」として、以前のトリアルヒー論を一応放棄し、また「社会的有機体の現存の基礎の変革なしに、私的営業と私的所有の廃止なしに〔……〕」、社会問題を『合法的な』方法で〔……〕、解決しようとする『労働の組織者』、『社会主義者』が我々を溺れさせようとしている。彼らは相変らず共産主義の哲学的基礎付けが問題であると思ひ込み、『善意の』組織計画に耽っている。」と哲学的社会主義へも批判を加えている。<sup>④</sup>

このようなヘスの動きは、一八四五年秋から四六年の春にかけて、なお、彼とマルクス、エンゲルス三者の共同活動の継続を可能にした。彼らは、外国社会主義者の翻訳叢書の計画を進め（ヘスは、『ブオナッローティとデザミー』を翻訳）、共産主義季刊誌の出版を計画した。またヘスは『ドイツ・イデオロギー』の著述にも加わり、クルマン批判の章と、現存しないルーゲ批判の章を受け持っている。<sup>⑤</sup>

しかし彼らの共同活動には、一八四六年半ば、齟齬が生じた。その切っ掛けとなったのは、マルクスらとヴァイトリングとの論争である。ロンドンの義人同盟の仲間と対立して、四六年のはじめブリュッセルに現われ、マルクスらがちょうど組織していた「共産主義通信委員会」に加わったヴァイトリングは、三月三〇日、同委員会の席上でマルクスとの激論に及んだ。更に五月一日の同委員会、ニューヨークのヘルマン・クリーゲを批判する回状の採択をめぐる、ヴァイ

トリリングは、マルクスらと対立する。ロンドンでの経緯からクリーゲを盟友と見做していたヴァイトリリングは、回状に反対するが、孤立し、失意のうちに遂にブリュッセルを去った。四六年の三月頃、恐らくは『ゲゼルシャフツシュピエール』の事務の便宜のため、ブリュッセルからドイツ国境に近いヴェルヴィエに移っていたヘスは、マルクスらの批判の仕方を不満として、この対立の局外に立とうとした。しかしマルクスはヘスに態度決定を詰め寄つたらしい。五月末ヘスは「君の党派とは、もう何の關係も持ちたくない」と宣言するに至る。⑦以後ヘスとマルクス、エンゲルスとの溝は、拡大こそすれ、埋まることはない。⑧

この出来事のあと、経済状態の悪化していたヘスは、六月か七月はじめ、ヴェルヴィエからケルンへ戻った。⑨当時既に、ケルンの共産主義者の間には、カール・デスターらのグループとゴットシャルクのグループが存在した。⑩ヘスは、従来の友人、アンドレアス・ゴットシャルク（一八一五―四九）のグループと行動をとる。このことはマルクスらのヘスに對する印象を更に悪くしたにちがいない。⑪

ところでヘスの今度のケルン滞在も長くは続かなかつた。十一月二七日、七月以来発行を中止していた『ゲゼルシャフツシュピエール』の再刊について協議するためヘスがケルンへ招いたエルンスト・ドロロンケが、その帰途、逮捕され、更に、一二月に入ると、ベルリン義人同盟のフリードリヒ・メンテルが逮捕される事件が起こつた。危険を感じたヘスは、一二月末ケルンを去って、パリへ逃れる。⑫

四七年一月から八月までヘスはパリに滞在した。その間の事情は、詳らかでない。ただ、彼がマルクスらの義人同盟加入に従つたことが推測されるのみである。⑬

四七年八月末、ヘスは、当時商用でパリにいた弟の要望を入れて、パリを去り、ブリュッセルへ向う。⑭ブリュッセルでは、マルクスらが、六月に「義人同盟」を改称した「共産主義者同盟」の班を形成していた。ヘスもこれに加わり、八月

未形成された同盟の外郭団体「ドイツ人労働者協会」では、副会長を務めるなどした。

一八四七年六月以降、共産主義者同盟の内部では、同年一二月に予定された第二回大会へ向けて、綱領案の討論が行なわれていた。ヘスも同盟員として、この討論に加わったのは、言うまでもない。この討論に触発されて、彼は、一〇月一四日、三十一日、十一月七日、一日の『ブリュッセル・ドイツ語新聞』に「プロレタリアートの革命の諸結果」と題する連載記事を発表した。

この論説は、ヘスがマルクスの見解をフォローしようと努力を払っていたことを示している。彼は、「原理ではなく、利害が、しかも今まで全く勢力を得なかった利害、無産の労働者の利害、彼らの生存が問題なのだ」という態度で議論を進めることを明らかにする。そして次のように「プロレタリアートの革命」を展望して見せる。

労働の価格が他のすべての商品の価格と同様に生産費に還元されることから、労働者の過少消費が生じ、この相対的な過剰生産から、商業恐慌が生じる。恐慌は規則的に繰り返して、大量の労働者を街頭へ投げ出す。この状況から逃れるためには、労働者は、蜂起して政治権力を奪取し、大工業の生産用具を収用して共同の国営企業を創設する方向へ向かわねばならない。<sup>⑩</sup>

ヘスは、このプロレタリアートの革命とそれに引き続く時期に取るべき方策についても、マルクスらに同意する。革命後、労働者の政府は、直ちにすべての私的企業を廃止するわけではない。「資本家への累進課税、部分的あるいは全面的な相続権の廃止、すべての使用されていない生産用具、諸侯の、教会の、貴族の、またはその他の革命によって無主となった財産の没収」「働きたい者すべてが加わることのできる、共同の、大規模な工業と農業の創設、すべての若者が国家の費用で教育、教授、実践的な観点からの陶冶を受ける国民的教育施設の設立、病人・労働不能者の援助」といった、既に民主主義者達も提案しているような、過渡的な方策によって、私的企業の生存圏を徐々に狭めてゆき、遂には私的所有

のない新しい社会秩序へ至るという道を取ることにすると、ヘスは考えていた。<sup>⑩</sup>

また、かつて社会革命をイギリスに想定した彼には、抵抗の少ないところであろうが、このプロレタリアートの革命はイギリスを要するという考えにも同意した。<sup>⑪</sup>

その他ヘスは「イデオロクは支配的な理念を採用する。彼が理念間の繋り、理念が生じてきた状況と理念との繋りを知らなければ知らないほど、支配者の理念を盲目的信念で採用し、大イデオロクとなる」と『ドイツ・イデオロギー』を思わせる議論を展開している。<sup>⑫</sup>

しかし、一方で、ヘスには、マルクスらにどうしても同意できない点があった。処女作以来、「貨幣貴族」を憎悪し続けてきたヘスには、彼らの、ドイツでは来るべき革命でブルジョワジーがまず支配権を握らねばならないという考えに従う気はなかったのである。<sup>⑬</sup>この「ブルジョワ革命」と「プロレタリア革命」との連関についての無理解は、更に、「民主主義者」「社会主義者」と「共産主義者」との関連についてのヘスの議論をも曖昧なものにしていた。

一八四七年一〇月半ば、七月末以来のブリュッセル滞在を終えてパリに戻ったエンゲルスは、同盟パリ班が相変らずの混乱が続いているのに悩まされた。<sup>⑭</sup>彼は、ヘスの連載記事が悪影響を与えているものと見做して、ヘスに悪感情を募らせる。しかし、ヘスとマルクス、エンゲルスとの微妙な関係は、なお四八年革命の突発時まで持続する。

一八四八年二月パリで革命が始まる。三月ブリュッセルに居たヘスは、ヘルヴェークの軍団に加わることを計画するが断念、四月はじめ単身ケルンに戻る。<sup>⑮</sup>ケルンでヘスは、フリードリヒ・アンネーケ（一八一八頃—一八七二頃）らとともに、『ライン新聞』再刊の準備を始める。四月一日マルクスらがケルンへ到着、ケルンの共産主義者の中で、労働者協会をpushしたゴットシャルクのグループとマルクスのグループとの対立が始まる。ヘスはゴットシャルクらとともに行動した。<sup>⑯</sup>しかし、五月半ば、彼は、新聞の計画が実現不可能と見極めがつくと、ケルンを去ってパリへ向った。<sup>⑰</sup>

以後、ヘスは、なお「理論的」にはマルクスの見解に賛意を表しながらも、再びマルクスらと顔を合わせることも、ともに活動することもない。<sup>⑧</sup>

① 一八四四年末に早くも、フオイエルバッハの「人間」の抽象性を指摘し、また『ドイツ・イデオロギー』のフオイエルバッハの章では著述のイニシアティブを取るなど、フオイエルバッハの人間主義解体にかけつけて、エンゲルスがマルクスに先行していたことについては、広松渉「初期エンゲルスの思想形成」『マルクス主義の成立過程』頁九六以下を参照。

また「民主主義戦略の問題に関しては何ともせず、エンゲルスが、一八四三年の『民主主義は……]一つの自己矛盾、非真理、根拠に欠けては偽善（我々ドイツ人が呼ぶところの神学）にはかならず』（*MEW*, Bd. 1, S. 481）とよく考えながら、一八四五年の『民主主義を今日では共和主義と呼ぶべき』（*MEW*, Bd. 2, S. 613）とどう考えくの転換を行なったこと、ヘンツェスが「一八四七年に入るまで民主主義を厳密に踏み切らなかつた」を指摘しつる。

② Vgl. Karl Grün an Hess, 1. 9. 1845, *HB*, S. 138 f.; Karl Grün an Hess, 6. 8. 1845, *HB*, S. 131 ff.

③ „Vorwort“ zu einer deutschen Bearbeitung von Buonarroti, *NOHF*, S. 85. Siehe auch Ebenda, S. 87.

④ Ebenda, S. 84 f.

⑤ *HS*, S. 479, Anm. 184.

⑥ Silbner, a. a. O., S. 254.

⑦ Hess an Marx, 20. 5. 1846, *HB*, S. 155 f.; Hess an Marx, 29. 5. 1846, *HB*, S. 156 f.; Hess an Marx, 5. 6. 1846, *HB*, S. 157 f.

Vgl. auch Daniels und Bürgers an Marx, 15. 5. 1846, *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien* (三) — Dokumente

と略), Bd. 1, 1970, S. 340 f.

⑧ なおこの時期以後も、マルクス、エンゲルスはヘスを「真正社会主義」に理論的基礎を与えたものと見做したが、直接、「真正社会主義者」に教え入れてはいない。

⑨ Silbner, a. a. O., S. 259.

⑩ Vgl. Bürgers an Marx, 11. 8. 1846, *Dokumente*, S. 391 ff.; Hess an Marx, 29. 5. 1846, *Dokumente*, S. 344 (*HB*, S. 159 の手紙と同じ)。Löllgenianer の説が異なる。

⑪ Engels an Marx, etc., 16. 9. 1846, *MEW*, Bd. 27, S. 44 f.; Bürgers an Marx, 11. 8. 1846, *Dokumente*, S. 393.

⑫ Silbner, a. a. O., S. 266 f.

⑬ 義人同盟内でフアイトリンツ派を排除してゲキニーを擁護しようとつづけたシャマンらのロンドン・グループは、ヘンツェスらを同盟に引き入れて同盟の模様替えを図った。四七年一月、彼らは、モルを特使としてヘンキーとフランクを派遣して、ヘンツェスの説得した。「一四」ヘンツェスらは同盟に加わり活動しつづけた（Vgl. *Dokumente*, S. 455）。特使モルは、三月に同盟内に入った形跡がある（Vgl. *MEW*, Bd. 27, S. 81, 464）。なお、その後のヘンツェスの動向やヘンツェスの手紙（*MEW*, Bd. 27, S. 44）など、ヘンツェスの四六年五月の「絶交宣言」は顔面を激しく衝突したヘンツェスの推定の手書となる。

⑭ Silbner, a. a. O., S. 269 f.

⑮ Die Folgen einer Revolution des Proletariats, *HS*, S. 429.

⑯ Ebenda, S. 430 f., 432 f., 433 ff., 439 f.

- ① Ebenda, S. 436 ff.
- ② Ebenda, S. 430, 432 f.
- ③ Ebenda, S. 442.
- ④ Ebenda, S. 429, 443 f.
- ⑤ 同盟第一回大会の前、代議員選挙をめぐって、パリの五つの班のうちヴァントリング派の二つの班が除名され (*Dokumente*, S. 478)、更に一〇月頃残った三つの班のうちから、もう一つの班が除名された (*Dokumente*, S. 584; *MEW*, Bd. 27, S. 98)。かつての義人同盟の中心だったパリは、四七年には見る影もなご。
- ⑥ Engels an Marx, 23-24. 11. 1847, *MEW*, Bd. 27, S. 106; Engels an Marx, 25-26. 10. 1847, *MEW*, Bd. 27, S. 98. Vgl. auch Engels an Marx, 14. 1. 1848, *MEW*, Bd. 27, S. 109 f., 112.
- ⑦ Silbener, a. a. O., S. 283.
- ⑧ 前述のように、四六年以来ケルンの共産主義者の間には二つのグループがあり、ヘスはゴットシャルクのまわりに集まるグループとの連絡を緊密化していた。四八年革命が始まると、ゴットシャルクらは、ケルン労働者協会を創設（会長ゴットシャルク）、帰国したマルクスらのグループ（デスターラのグループを含む）と、その労働者協会の指導方針や、選挙戦術をめぐって、激しく対立した。ヘスはゴットシャルクに与し、労働者協会の「議長補佐委員会」の一員に名を連ねた。
- ⑨ Silbener, a. a. O., S. 286 f.
- ⑩ 「カール・マルクスを指導者と認めるドイツの社会主義者たち」は、マルクスのブルードン批判書や「ヨーロッパの情勢の適切な評価」を行なっている『新ライン新聞』に見られるように、理論的確固さを持っている。「そのかわりに、これらの全知のドイツの社会主義者は何も実行できない。」彼らは「教養ある経済学者の学派」であって、大

- 衆の後補がないから *Das jüngste Gericht über die alte sociale Welt, Dokumente des Sozialismus*, Hrsq. von E. Bernstein, Bd. 1, 1902, Nachdruck 1968, S. 539 f.)。五一年時点でのヘスは「理論」と「実践」という対概念を使って、以上のようなマルクス派への評価を下している。また、同じ論説で、ヘスは、「人類はその成員の敵対状態によって進歩してきた。〔……〕いつの時代にも社会革命は、労働の進歩が支配階級によって阻害された時に突発してきた。これらの階級は、彼らの利害が社会的生産の進歩と一致しなくなる時はじめて反動的になった。労働はたえず進歩のために組織され、労働の進歩はたえず生産力を増大させ、完成させ、生産様式を生産力の高むまで高めるためだ〔……〕たえず大きな革命が突発してきた」と一般的な歴史観としては「応唯物史観に類似した見解を述べている」(Ebenda, S. 547, Vgl. Ebenda, S. 549)。
- ⑪ 四八年以後のヘスの行動を略記しておく。
- ⑫ 四九年四月まで、パリの共産主義者同盟の外郭団体「ドイツ協会」の会員として活動したあと、各地を転々とし、五〇年四月ジュネーヴに入ってその地のヴェイリッヒ・シャッパール派を指揮。五一年末、ルイ・ポナバルトのクーデター後、革命の展望を失なっており、文筆活動・政治運動から離れる。五二―五三年までベルギー滞在。五四年後半パリに落ちつく。五五年、自然科学の論説を発表して文筆活動を再開。一八六〇年、ポーランドやイタリヤの復興運動に刺激されてユダヤ国家の復活を求める論調が出現する。六二年シオニズムに一つの哲学的基礎を与えたといわれる『ローマとエルサレム』を出版。六三年ラッサールの「全ドイツ労働者協会」のために活動。ラッサール死後も「協会」に協力し、『ソツィアル・デモクラート』への寄稿活動等を行なう。しかし六七年エルフルト選挙綱領を不満として「協会」を脱退。六八年インターナショナル派へ接近して、同年のブリュッセル大会へ出席。

更に六九年にはバーゼル大会へ出席し、大会後バクーニンと論争。同時にアイゼナツハ派の『フォルクスシユタート』への寄稿を始める。一八七〇年普仏戦争突発、パリを追放され、ブリュッセルへ赴く。ブ

リュッセルでは反プロイセン派として振る舞う。パリ・コミューン後の七一年一月パリへ帰還。以後、自然科学の著書の完成に専心。七三年から七五年病臥。七五年四月六日死亡。

(京都大学大学院生・

# Moses Heß im Vormärz

von

K. Taniguchi

Moses Heß, geboren 1812 in Bonn als Sohn eines jüdischen Geschäftsmanns, ist einer der frühesten Sozialisten in Deutschland. 1837 veröffentlichte er das Erstlingswerk „Die Heilige Geschichte der Menschheit“, in dem er sich als religiösen Sozialisten zeigte. Dann 1841 brachte „Die Europäische Triarchie“ ihm den schriftstellerischen Ruf. Im gleichen Jahr nahm er lebhaft an den Vorbereitungen zur Gründung der „Rheinischen Zeitung“ teil, dessen Mitredakteur er wurde. Mit Karl Marx, den er damals kennengelernt, zusammenarbeitete er vom Winter 1843/44 zum zweitnächsten, währenddessen übte er auf Marx einigen Einfluß aus. Jedoch seit der Mitte 1846 wurde er als der die theoretische Grundlage des Wahren Sozialismus schaffende heftig kritisiert von Engels und Marx, mit denen er sich endlich 1848 abwandte.

Vorliegender Aufsatz behandelt die gedankliche Entwicklung von Heß bis zu dieser endgültigen Trennung von Marx, nämlich durch die Darstellung seiner Anschauungen auf jeder Stufe der Entwicklung, ohne die man nicht gelangen kann zum Gesamtbild von Heß, der manchmal den Gedanken beträchtlich veränderte.